

しながらながめてみると、ほとんどのタンポポ亜科は第2図Aのような形をして、凹部の種類及び数も類似しており、*Tragopogon* 属もその属の特有な特徴を示しているが(第2図B) *Scorzonera* 属においては変化にとんでいる花粉とはいえ、この属に共通な特徴とされている赤道凹部が第2図C, Dの様に赤道上溝間に2個ずつならんで計6個なければならないのが、*S. monocarpica* のみはこの赤道凹がなく、むしろもっとも普通な形の赤道上に畝をもち両極の方向にわかれた口側凹部となっている。溝の部分は口上凹部を有し、中央部の赤道上に突出が明りようである。また極凹も他のこの属のものとなった方向に分かつされた極凹となっている(第2図E)。この様な花粉は *Scorzonera* 属の花粉でははじめてみられたものではないかと思われる。

尚凹部については次の様な訳語を用いることにした。口凹部 (poral lacuna), 赤道凹部 (equatorial lacuna), 口側凹部 (paraporal lacuna), 口上凹部 (abporal lacuna) 口間凹部 (interpolar lacuna), 極凹部 (poral lacuna)。

おわりに本研究をなすにあたって貴重なる材料と機会とをあたえられた北村四郎教授に深甚の謝意を表します。

文 献

WODEHOUSE R. F. 1959: Pollen Grains.

KITAMURA S. 1960: Flora of Afghanistan.

ペラペラヨメナ *Vittadinia triloba* Dc., Prodr. V: 281 (1836). *Brachycome triloba* GAUDICH., Voy. Freyc. bot. 467 (1826). *V. australis* A. RICH., Ess. Fl. Neuv.-Zél. 251 (1832).

多年草、基部から多くの枝を分ち、開出し、先は上向して高さ 30—40 cm となる。径 15—21 mm の頭花をつける。軟毛が生えている。下葉はさじ形で長さ 3—5 cm 3(5) 尖裂、薄くて細い長毛が散生する。上部の葉は次第に小さく倒披針形 12—18 mm となる。花は5月から11月まで咲く。長柄があり、総苞は半球形、径 8 mm、総苞片は 2—3 列、披針形、まばらに毛がある、ふちは白膜質、内、外のものはやや等長。舌状花は 1 列、白花、長さ 6.5 mm、筒状花は多数、長さ 3 mm、冠毛は白色長さ 2 mm、このほかに極めて短い列がある。果実は扁平、長さ 0.8 mm 花柱の枝は扁平、先は円形で、乳頭状突起が多数つく。葯の基部は鈍形。花盤は無毛 (foveolate)。

原産は南半球のニュージーランド。日本では1949年6月30日に私が京都大学の標本庫の壁の西側で野生化しているのを採集した。これはその後毎年よく開花し、本年も絶えないが、標本庫から離れたところで見かけない。この場所は標本庫の二階からゴミをはきすてる下で、戦前にはその上には外国産の標本が入っていたから、それと関係があるかもしれない。しかし京大には *V. triloba* の外国標本が当時なかつたことを申しそえる。

次ぎは金沢市木曾町で1952年7月31日に里見信生氏が採集されたもの(逸出品?とあり)。1958年4月25日には村田源氏は大阪市住吉町の平野信氏宅で栽培のものを標本とされた。1953年9月18日には鈴木貞次郎氏が東京で栽培のものを標本とされた。1960年には原・金井・村田・富樫・津山氏等が印度のダージリンで6月21日に逸出品を採集された。1961年8月9日に私は京都の一乗寺の武田農場に多数栽培されているのを見た。和名のペラペラヨメナというのは京大の私の採集した標本につけてある名である。ペラペラヒメジョオンともあつた。人から聞いて書いたのか、自分でつけたのかおぼえてない。一見ヒメジョオンに似ているが丈が低くて枝が開出し、花柱の先が披針形(シオン属・ヨメナ属・ムカシヨモギ属)でなく円形であるのでちがう。(北村四郎)